家　庭　科

藤　本　文　乃

１　家庭科における知識創造とは

家庭科における知識創造の定義

家庭科における知識創造を次のように定義することにする。

> **生活にかかわる課題を解決していく活動を通して　家庭生活に関する知識や技能を　自分にとって意味のあるものとして実感をもってとらえ　生活の中に生かしていこうとする営み**

家庭生活に関する知識とは

家庭生活を構成している要素

*1 家族などの人や衣食住にかかわるもの､時間や金銭などで､広くは社会環境も視野に入れるものとする

家庭生活に関する知識とは、家庭生活を構成している要素*1を知り、それらが互いに関連しあって生活が営まれているという家庭生活の成り立ちを知ることである。今日の子どもたちは、家事労働の経験が少なく生活技能が貧しいと言われているが、経験だけでなく衣食住に関する行為そのものに関心を持って見ることも少なくなっている。毎日の家庭生活の営みが、家族によって支えられていること、自分も家族の一員としての役割を担っていること、自分の生活のあり方が周囲と関係していること、その営みには意味があることなどへの気づきはもちろん少ない。また、家庭生活そのものが利便性に富んだ物になっているため、かえってその意味や大切さが意識されないまま日々生活している。親から子へと伝えられてきた生活技能や知識・知恵も親自身の中から失われつつある。このような状況で生活に必要な知識や技能を伝達的に教えられても、それは実感の伴わない単なる知識として記憶に留まるにすぎず、自分の生活と結びつけ生活の中に生かすことは難しい。

自分にとって意味のあること

自分の家庭生活を見つめなおす中から課題をもち、それを多様な生活の仕方や考え方をもつ仲間とかかわりながら解決していくなかで知識や技能を習得し、それを生活の中でどのように生かすかを考え実践する。知識や技能を生かして自分の生活がちょっとした工夫でよりよくなること、自分も生活主体者として生活に関わることを選んだり行ったりできること、家族のために何かができることに気づいたり実感したりしたとき、学んだことが自分にとって意味のある知識や技能となるのである。体験し実感する実践を積むことは、また自分の生活を見つめることになり、その成果を仲間と交流することでさらに意味を深めたりとらえなおしたりしていく。この一連の流れを重ねていくことで、自分の生活をよりよくしていこうという意志を育んでいくと考える。

２　家庭科における「かかわり」の活性化とは

子どもは、生活の仕方に対しあまり目を向けていない、あるいは現状の自分の生活の仕方しか知らないでいる。それが、仲間の生活とのちがいに目を向け、多様な価値観や考え方、生活の仕方があることに気づいていくことが、家庭科における「かかわり」であるととらえる。すなわち

（１）ちがいや現実を肯定的にとらえたり疑問を持ったりすることから、自らの課題をもとうとする
（２）仲間とともに考えたり情報を集めたりして、課題解決の方法を考える
（３）課題解決に向けて、仲間と考えを出し合いながら試行していく
（４）実践の成果を交流し合い、友達のよさを取り入れようとする

このような学習活動での仲間とのかかわりから､「自分の生活をこうしてみよう」という生活改善の意志を育むことが「かかわり」の活性化であると考える。

３　「かかわり」を活性化するために

「かかわり」を活性化するための手だてとして、全体論で述べられた重点にそって述べることとする。

●意図を明確にする

当事者意識

・子どもの生活に結びつく明確な題材構成や学習の流れを組み立て、当事者意識をもって学習に取り組めるようにする。

意外性のある題材

・子どもたちの生活実感から離れることなく、生活に生かしていけるような教材をとりあげる。また、反対に一見生活とは結びつかないようなものや場面をとりあげ、意外性のあるもの、こと、人などとの出会いを仕組む。それらを学習していく過程で、自分の生活に通じることや活用・応用できることが見えてくるようにし、人間にとっての生活の根っこの部分の普遍性や重要性に気付かせる。

・実験や試行を行うに当たっては、その目的を明確にし、結果と生活とをつなぐようにする。

これらの手だてをとるに当たっては、事前アンケート等で子どもの生活の様子や経験、興味・関心等を把握し、題材へのアプローチの方法や知識創造の内容を焦点化することが大切である。

●「かかわり」の有用性の自覚を促す

自己の願いの意識化

・自分の生活を見つめ、素朴な疑問や生活実感を出し合い、「そうなんだ。」「そんな生活の仕方や考え方があるのだ。」「なぜちがうのかな。」といった思いや「ちがって当然なのだ。」「自分に合った生活の仕方があるのだ。」という思いをもつ時間を大切にし、「自分はどうしようか。」「自分はどのように生活したいのか。」「そのために何をしたらよいのか。」といった自己の願いの意識化に結びつくようにする。

・題材や扱う教材によって、グループ構成を変化させながら、多様な生活実態だからこそ生まれる考え方のぶつかり合いや、深め合いが新たな知識や技能の習得に結びつくようにする。

課題選択

・個々の生活実態や課題に対応できる課題選択型の構成もとりいれる。ちがう課題への取り組みを交流することを通して、新たな見方や考え方が得られるようにする。

・授業と生活の場とをつなぐ試行を行うことで仲間とのかかわりの必要感や学習への意識を高め、修正、実践への意欲を促す。

・課題解決のための方法や資料を効果的に提示する。また、個々のもつスキーマを引き出したりつないだりして考えるヒントを与えるようにする。

●差異への気づきを促す

家庭との連携

・自分自身の生活実態を自覚しなければ、仲間との差異にも気づかない。視点を与えじっくり自己の生活を見つめる時間をとる。そのための活動が、家族にインタビューすることや生活ウオッチングである。また、なりたい自分の姿や、家族の願いを考え、現実とのちがいをつかませる。

・かかわりの何によって自分の考えが高まったり課題解決に結びついたりしたかが明確になるように、自己評価の視点を明らかにする。また、学級通信で学習のめあてや内容を伝え、家庭との連携を図って家庭における子どもたちの主体的な実践を支援する。

これらのどの手だてをとるかは、題材によってちがいがある。学習の最後には、全員に「家庭科実践カード」を配布し、学んだことを生かして家庭実践を必ず行うようにする。

「かかわり」を活性化するための手だてとして、全体論で述べられた重点にそって述べることとする。

●意図を明確にする

・子どもの生活に結びつく明確な題材構成や学習の流れを組み立て、当事者意識をもって学習に取り組めるようにする。

・子どもたちの生活実感から離れることなく、生活に生かしていけるような教材をとりあげる。また、反対に一見生活とは結びつかないようなものや場面をとりあげ、意外性のあるもの、こと、人などとの出会いを仕組む。それらを学習していく過程で、自分の生活に通じることや活用・応用できることが見えてくるようにし、人間にとっての生活の根っこの部分の普遍性や重要性に気付かせる。

・実験や試行を行うに当たっては、その目的を明確にし、結果と生活とをつなぐようにする。

これらの手だてをとるに当たっては、事前アンケート等で子どもの生活の様子や経験、興味・関心等を把握し、題材へのアプローチの方法や知識創造の内容を焦点化することが大切である。

●「かかわり」の有用性の自覚を促す

・自分の生活を見つめ、素朴な疑問や生活実感を出し合い、「そうなんだ。」「そんな生活の仕方や考え方があるのだ。」「なぜちがうのかな。」といった思いや「ちがって当然なのだ。」「自分に合った生活の仕方があるのだ。」という思いをもつ時間を大切にし、「自分はどうしようか。」「自分はどのように生活したいのか。」「そのために何をしたらよいのか。」といった自己の願いの意識化に結びつくようにする。

・題材や扱う教材によって、グループ構成を変化させながら、多様な生活実態だからこそ生まれる考え方のぶつかり合いや、深め合いが新たな知識や技能の習得に結びつくようにする。

・個々の生活実態や課題に対応できる課題選択型の構成もとりいれる。ちがう課題への取り組みを交流することを通して、新たな見方や考え方が得られるよう

⑵　実践的・体験的活動の重視

新しい事実との出会い

実感を伴う活動

新たな意味をもった知識を得ていくためには、課題意識をもった実践的・体験的活動を効果的に取り入れ、新しい事実との出会いを行っていくことが重要である。実践的・体験的活動としては、調査、観察、実験、試し作りなど多様な活動が考えられる。その方法を仲間と考え、協力して取り組み、考えを出し合って、実感を伴って課題解決し、新しい知識を得て技能を身につけていくことができる。実感を伴うことで、知識をより自分の生活と結びつけやすい。また、課題解決に取り組んだ結果の交流を通して、仲間の解決方法や工夫、考え方等を知り、自分の結果や認識と合わせて、よりよい生活の仕方についての選択肢を広げていくことができると考える。

⑶　かかわりの相手や形態の工夫

必要感や目的

かかわりの相手は必ずしも同じクラスの仲間とは限らない。異学年、家族、地域の人、ゲストティーチャー等多様な想定ができる。しかし、課題に応じてその人とかかわる必要感を持たせたり、学習過程のどの段階で、何を目的としてかかわるかを明確にしたりすることに留意しなければならない。ここでのかかわりは、言語だけでなく、実物の利用、図や写真や表の利用、黒板の利用などもある。グループによる課題解決の取り組みの結果をポスターセッションで交流することも考えられる。学級全体、課題別グループ、ペア等学習形態も題材やねらいに応じて変えていく。一人実習や作品鑑賞という形態においても、仲間のやり方や作品のよさを認めながら、自分の考えを深めていくことができる。

⑷　自己の高まりを自覚できる評価の工夫

プロセスの評価

家庭生活で生かす活動

学習の過程や、学習後には、学びに応じた自己評価、相互評価、他者評価を取り入れる。学んだことが自分の生活にとってどんな意味があるのか、自分の生活に生かせることなのかという、得られた知識に関するふりかえりと、学びのプロセスのふりかえりによって、自己の高まりや、かかわりによって学びが深まっていくよさの自覚をうながす。

そして、学びを通して得た新たな考え方や知識や技能を、自分の家庭生活に生かすことができる場を設定する。実際にやってみることで、これまで学習してきたことの価値を、実感をもってとらえることができ、さらに新たな課題をつかむこともできる。そして、自分の生活に生かせたかどうか、自分なりの工夫ができたかどうかのふりかえりに、自己評価とともに、家族からの評価も生かしていく。このような家庭実践を、学級通信で仲間に広める。あるいは、実践発表会を開いて交流する機会をもったりする。

このような過程を継続し、学びの記録を２年間通して蓄積していくことで、自分の生活を自分で構築していく、生活主体者としての基礎が育まれると考える。